

教養コース 文学講座

おくのほそ道の世界

『おくのほそ道』の世界(全5回)

日 時 全5回 9月7日～10月7日 10:00～12:00
場 所 みずほ台コミュニティセンター集会室
講 師 谷地快一先生 東洋大学名誉教授
受講生 142名(全5回 延べ人数)

第1講：9月7日(日)10:00～12:00

今年から三年かけて『おくのほそ道』を読み解くという計画が示された。全体を序章・本章・終章の三期に分けて、第一期(令和7)は武蔵・下野、第二期(令和8)は陸奥・出羽、第三期(令和9)は越後・越中・加賀・越前・美濃と読み進めるといふ。三年という期間は長いようだが、どこから受講しても芭蕉の人生や思想、そして俳諧という文芸にふれられるようするという話であった。

第一期にあたる今年の副題は「深川出庵から殺生石・遊行柳まで」。そして、この日の題目は「深川出庵」(東京都江東区)である。講義はまず、〈人生という旅は出掛けて戻るのではなく、逢って別れることの連続である〉という芭蕉の根本的な考えを説き、「草の戸も住み替はる代ぞひなの家」という出立の句もその例であるという。さらにこの章段に「白河の関」「松島」とあることから、この旅の目的が〈みちのくの歌枕探訪〉と予見できるということであった。

第2講：9月14日(日)10:00～12:00

この日の題目は「千住」(東京都足立区)と「草加」(埼玉県草加市)。二つの章は地名による章段分けという方針から便宜的に二つに分けたが、内容は二章合わせて「旅立ち」の世界であるという。つまり、「千住」では「弥生も末の七日」という出立の日付を明らかにし、「前途三千里のおもひ」という感傷を「行く春や」という句で結び、「草加」では歌枕、すなわち「耳にふれていまだ目に見ぬさかひ」を訪ねるという、この行脚の目的を明らかにしつつ、旅の初日の疲労と旅愁を悲痛な覚悟をもって語る重要な章段であるという。

第3講 9月21日(日)10:00~12:00

この日の題目は「室の八島」(栃木市惣社町)と「日光山」(栃木県日光市)。「室の八島」は歌枕(古歌に詠み込まれた名所)とは何かを具体的に定義する章段で、物語の女神である「木の花さくや姫」が〈一夜の契りで懐妊〉したことを夫のニニギノミコトに疑われ、〈身ごもったまま戸口のない室に入り火をつけて、猛炎の誓いのなかで無事にホホデミノミコトを産んで疑いをはらした〉という物語を紹介。その伝説から〈人を焼く匂いに似るコノシロ(コハダ・ツナシ)〉を嫌うという縁起を紹介しつつ、和歌においては「煙」を詠み込むという決まりを説く。

「日光山」は〈現世を生きる姿そのものが「仏」である〉という仏道の死生観によって、まず宿の主人五左衛門の「無知無分別」「正直偏固」「剛毅木訥」なる人柄を讃える。次にこの「日光」の地を空海開基の山として、仏道が国土のすみずみまで平和をもたらしていることを讃え、旅立ちの際に僧形になった同行曾良を改めて紹介。そして、僧徒の夏行を真似て裏見の滝に籠もる一句で結ぶ。

第4講 9月28日(日)10:00~12:00

この日の題目は「那須野」(栃木県那須山麓の広野)と「黒羽」(栃木県大田原市)。「千住」と「草加」の関係に同じく、ここも便宜的に二つに分けたが、「那須野」の書き出しが「那須の黒羽と云ふ所に知る人あれば」とある通り、ひと続きの章段であると解説。まず「那須野」では、広々とした那須野で困り果てる芭蕉主従に「野飼の馬」を貸してくれる純朴かつ人情深い農夫と、馬の跡を慕って付いてくる二人の子どものうち、女の子の名を「かさね」と聞いて、曾良に「かさねとは八重撫子の名なるべし」と詠ませて、旅の風情を演出しているという。

「黒羽」は「浄坊寺何がし」と「桃翠」兄弟に歓待される様子を描く。すなわち、犬追物の跡(騎射の訓練場)・玉藻の前(狐の化身である伝説の美女)・金丸八幡宮(那須与一祈願)などを見て、光明寺(修験道。行者堂に役行者の像を安置していた)を拝し、「夏山に足駄を拝む首途かな」という一句を残す。この句には行脚の心意気を、改めて示す意図が込められているという。

第5講 10月5日(日)10:00~12:00

この日の題目は「雲巖寺」(大田原市雲岩寺)と「殺生石・遊行柳」(那須郡那須町の湯本及び芦野)。「雲巖寺」は黒羽滞在中の一日のことだが、芭蕉参禅の師である仏頂和尚を讃える独立した章段とのこと。まず和尚が修行中に「豎横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば」という和歌を詠んだ、その跡をみたいという訪問の意図を述べ、寺までの逍遙の次第と寺の奥深い環境を描き、仏頂の徳を讃える「木啄も庵はやぶらず夏木立」という一句を詠んで独立した名場面を創造しているという。

「殺生石」は黒羽でふれた「玉藻の前」が死後に石と化して、毒気を吐いて生きものを殺すという伝説が謡曲『殺生石』などによって広まった名所。「遊行柳」は芭蕉が敬慕する西行が「道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ」（新古今集）と詠んで、これまた謡曲『遊行柳』で有名になった名所。芭蕉と曾良は黒羽の館代が提供する馬で出立。その馬子が芭蕉に「記念に一句をいただきたい」と望んで、名句「野を横に馬ひきむけよほととぎす」を即興で書き与えた話を前置きして、〈殺生石には、いまだに蜂や蝶のたぐいが重なり合って死んでいた〉と記す。「遊行柳」は芭蕉の西行敬慕の念を知る芦野の領主がぜひ見せたいと言っていた地元の名所で、芭蕉は念願の柳のそばで西行を偲びながら休憩し、「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」という感慨を一句に残したという。



報告 出射あや子